

高度経済成長期の山形地域における親子読書運動試論

A Trial Study of the Parent-Child Reading Movement in the Yamagata Region during the High Economic Growth Period

高畑 早希 TAKABATAKE Saki

(デザイン領域)

はじめに

本論は高度経済成長期の山形地域における親子読書運動について、その特徴の一つである「出稼ぎ問題」と「母」の表象について論じるものである。

筆者は前論「民話絵本がもたらす波紋：一九七〇年代の山形と東京の民話運動をめぐって」(『東北文学の世界』第31号、2023年3月)において、1970年代半ばの山形地域で「民話」を用いた文化運動が活発化したことを論じた。山形地域で民話を活用した文化運動が起きた背景には、『山びこ学校』(1951年)などの生活綴方に端を発する〈児童文化運動〉を1960年代半ばに再び活性化させようとした動きと、高度経済成長下で激変する農村の実状や、地域の口承文芸を記録しようとする〈民俗学の探訪活動〉の進展、そして、子どもの文化に軸足を置く東京の〈民話運動〉と山形地域の活動の合流が関係していることを、前論では明らかにした。

本論は、山形地域の「民話運動」が活発化する1970年代半ば以前の〈児童文化運動〉の動きに着目し、そのなかでも農村を対象とした親子読書運動の特徴について論じるものである。土田茂範や北河賢三の述べるように、1960年代前半に一時停滞していた山形の〈児童文化運動〉は、地域の教育文化運動の牽引者である須藤克三が、『出かせぎ村のゾロ』(1968年)を出版したことを機に、「山形の子どもたちに山形の作家による児童文学を普及しよう」とする気運の高まりのもと再活性化したとされる¹⁾。本論では、親子読書運動における『出かせぎ村のゾロ』の受容に着目することで、「山形の作家による児童文学を普及」するためにエージェントとして見出される「母」の存在と、地域の社会問題として1960年以降深刻化していた「出稼ぎ問題」との関係について指摘したい。

1. 高度経済成長期の「出稼ぎ問題」

日本における「出稼ぎ問題」は1960年代から1970年代に集中してあらわれた現象といわれる²⁾。「国民所得倍增計画」を掲げた池田勇人内閣は、急成長する工業部門へ農村から

1) 土田茂範編『海図のない航路』北の風出版、2004年、pp. 420-421。北河賢三「須藤克三と戦後山形の教育文化運動」『戦後史のなかの生活記録運動：東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年。

2) 北原克宣・阿部健一郎「第3章出稼ぎ問題：出稼ぎと農村社会の変貌」『戦後日本の食料・農業・農村 第11巻 農村社会史』農林統計協会、2005年を参照。

労働力を供給するために、「零細農家」を大幅に減らし、少数の農家による「近代的な農業」の実現を目指して農業基本法（1961年）などの法律を打ち出していった³⁾。しかし、政府の目指した「零細農家」の離農は思惑通りには進まず、かれらの多くは農地を残したまま、農閑期に工業地帯などへ出向く「出稼ぎ労働」を行うようになった。農業だけでは、生活費や新しい農業機械の代金、子どもの学費などは賄いきれないが、不安定な生活を担保する唯一の財産である農地を手放すことなどできない「零細農家」の多くは、農外収入によって必要な費用を補填する道を選んだのである⁴⁾。

「高度経済成長」の呼び声のもと、企業による設備投資や公共投資の拡大が進むなか、中核工業都市の遠隔に位置した東北・九州・北陸などの純農業地帯の「出稼ぎ労働者」は、「労働力の調節弁」として重宝されるようになる⁵⁾。しかし、慣れない作業による事故や、賃金の不払い、農村の空洞化、出稼ぎ者自身と残された家族の肉体的・精神的ストレスなどの問題が起こり、それらは「出稼ぎ問題」として注目されるようになった⁶⁾。

1960年代前半の山形では、例えば、村山市の教育委員会内にあった「無名山脈の会」が、「東北農村の出稼ぎの実態」（『月刊社会教育』1963年4月号）を報告しているが、「出稼ぎ問題」のなかでも特に、農村の空洞化や賃金の不払い問題、村に残された女性たち、特に「若妻」と呼ばれた20代から30代半ばの母親の労働や教育負担の増大、「嫁姑の確執」が問題視されている。

本論で取り上げる『出かせぎ村のゾロ』という山形地域発の児童文学は、こうした「出かせぎ問題」が深刻化するなかで書かれた作品である。

2. 『出かせぎ村のゾロ』と村に残された子どもの「声」

『出かせぎ村のゾロ』は、山形の文化運動の「巨人」⁷⁾である須藤克三が1964年より新聞や雑誌で連載し、1968年に理論社から出版された小学校3年生以上向けの児童文学である⁸⁾。

『出かせぎ村のゾロ』の主人公は、小学6年生のジロと小学4年生のサブの兄弟で、二人の両親は11月から3月まで、東京の土木工場の現場や「飯場」で働く出稼ぎ者である。そのため、ジロとサブの兄弟は冬の間の5か月を祖父と祖母との4人で暮らしている。

物語は、両親が東京から帰ってくる4月からはじまり、再び二人が東京へと戻ってしま

3) 老川慶喜『もういちど読む山川日本戦後史』山川出版、2016年、pp. 103-104

4) 姉齒暁『農家女性の戦後史：日本農業新聞「女の階段」の五十年』こぶし書房、2018年を参照。

5) 高木雅史「1960年代から1970年代の農村における出稼ぎ・家族計画・子どもの教育の関係：雑誌『家の光』における「カギっ子」問題を中心に」p. 198

6) 注5に同じ。

7) 1981年時点で須藤克三がリーダーをつとめた組織は、「山形県児童文化研究会」、「山形童話の会」、「山形県作文の会」、「山形県紙芝居の会」、「山形とんと昔の会」、「北の児童文学の会」の7団体にのぼる（注1 北川賢三『戦後詩のなかの生活記録運動』p. 141を参照）。

8) 対象学年は小学生文庫版の『出かせぎ村のゾロ』（1968年）の裏表紙に基づく。以下、本文引用は、『名作の愛蔵版 出かせぎ村のゾロ』理論社、1986年版による。

うまでの約1年間を描く。「出稼ぎ家庭」はジロとサブの家だけではない。二人の近所に住むミツコとトモキチ姉弟、ジロの同級生のタツペやノブ、シンタの家も親が遠くに働きに出る「出稼ぎ家庭」で、彼女かれらの親のなかには「出稼ぎ問題」を抱えて村に戻ってくる者もいる。

そのような親たちをみつめるジロたちは、自らを「カイケツ・ゾロ（怪傑ゾロ）」になぞらえて、出稼ぎ問題を解決しようとさまざまな方法で奮闘していく。

例えば、村の有力者で出稼ぎの斡旋業にも関与している「トンベだんな」に、タツペの父が騙されて賃金未払い問題が生じた際には、ジロたち小学生は6人のデモ隊を組織して、「ショクアン（職安）」や「ロウドウキジュンカントクショ（労働基準監督署）」に向かって「チンギンミハライのデモ」を起す。小学生たちの和気藹々とした、しかし真剣なデモは、物語上では終盤に、大人たちが「出かせぎ組合」をつくり「トンベだんな」たちへ抵抗する展開の布石の役割を果たしている。

また、本作では、出稼ぎ家庭の子どもを都合のいいように懐柔しようとする学校長やPTA会長の思惑を背景として、ジロたちのグループが解体させられ、ジロが「ムラハチブ（村八分）」になる波乱も生じる。仲間から孤立してもジロは一人、「出稼ぎ問題」に立ち向かっていくのだが、紆余曲折の末に仲間と和解し、かれらが再び「ゾロ」として力強く生きようとする展開も、子どもたちの成長物語として、本作では読みどころになっている。

しかし、気丈にふるまい続けるジロにも「弱さ」が存在する。それは、母の不在に対する拭い去れない不安である。冬の間は父に代わって一家の「大黒柱」になることを決意するジロは、そのために、本当は感じている母の不在に対する不安をなかなか口にすることができない。物語のラストでは、吹雪の晩、母親を求めてうなされる弟のサブを抱きしめながら、ジロは一人、闇に向かって次のようにひとりごちる。

おらあ、サブのゆめのなかの、おっかになってやるぞ。

ジロは、サブをしっかりとだいた。

「おっかあ——。」

サブは、安心したように、小さいこえでいったが、そのまま、ねむってしまった。

サブ——。

おっかがそんなにこいしいか。

サブ——。

おっかがこいしいのは、サブばかりじゃねえ。おらあも、おっかがこいしいんだ。

でもなあサブ。

おっかは、春になると、かえってくるんだ。

春になると、かえってくるんだぞ。

そして、いつかは、きっと、おっかが、どこにもいかねえ春がくる。おらあ、そのときまで、どんなこともがまんする。

ジロはぐっとくちびるをかみ、やみをにらんだ。

外はフブキ。

フブキの中の天と地だ。

やみが、フブキをつつんでいる。

『出かせぎ村のゾロ』 pp. 211-212

父親と母親の両方の役目を引き受けようとする小学生のジロが、「やみ」をにらみつけながら放った、「おらあも、おっかがこいしいんだ」という本音は、作品世界内ではだれにも届かない「声」として闇夜に吸い取られ、物語は幕を閉じる。しかし、だからこそ、この小説を読み終わった読者は、ジロの「本音」の唯一の聞き手として、何らかの「応答」をもとめられることになる。それは、ジロやサブの求める「おっかあ」を作り出すという応答でもあった。

3. 「出かせぎ村」と親子読書運動、そして「母」

『出かせぎ村のゾロ』においてジロの母親は、作中に登場するが、ほぼ言葉を発さない存在である。母親は、ジロたち兄弟と言葉を直接交わすよりは、主にジロの語りを通したイメージとして立ち現れるように描かれる。

例えば、ジロは、物語の冒頭で小学校の担任の先生が教室に飾ったモナリザの絵に母の面影を感じたり、物語終盤では、そのモナリザから発想を得て、出稼ぎに行く親たちのために作った「出稼ぎ地蔵」に母を重ねたりする。また、先に引用した吹雪の夜に、ジロの心を支えるのが、母が以前、兄弟に語ってくれた昔話であるなど、ジロの語りによる母親は、現実の母というよりも、モナリザや地蔵などの偶像化されたイメージや、昔語りをしてくれた過去の幸せなイメージとして立ち現れる。これらは彼らを情緒的に安心させたり、「心の支え」として機能する「母」の形象といえるだろう。

その「母」のイメージが示されつつも不在になったり、不安定な存在としてあり続けたりが、『出かせぎ村のゾロ』では気丈なジロまでをも弱らせる「悲劇」として用意され、読者にジロの不安を埋める「母」の創出を要求する。

児童文学の用意したこの要求に、当時、現実社会で応答した活動の一つが親子読書運動であった。

戦後の親子読書運動は、児童文学作家で鹿児島県立図書館長の椋鳩十が提唱した「母と子の20分間読書」を一つの影響源とする形で、全国に普及した。最盛期には12万人が参加したこの運動⁹⁾は山形県へも波及しており、県立図書館の司書や学校の教員が1960年代

9) 高橋樹一郎『子ども文庫の100年：子どもと本をつなぐ人びと』みすず書房、2018年、p. 127

半ばから実践を行っている¹⁰⁾。

椋が記した指南書『母と子の20分間読書』（あすなろ書房、1961年）によると、「20分間読書」とは、「教科書以外の本を子どもが二十分間くらい読むのを母が、かたわらにすわって、静かに聞く。たった、これだけのことである」¹¹⁾と説明される。この20分間は毎日繰り返すことを推奨されるが、時間は「10分でも、15分でもいい」¹²⁾という。

子どもの朗読の聞き手に母親が推奨される理由は、あたかもそれが自然であるように明確には記されていない。ただ、親と子どもが家庭内で落ち着いて過ごす時間の少なさを問題にする椋は、かつて助産師として忙しく働いた母親と幼少期の自身との関係性を振り返り、そこに特別な意義を見出している。例えば椋は、「母と子の、二人だけの時間」をなかなか持てなかったさみしさを感じつつも、疲れて先に寝てしまった母に抱き着いて、その「においをかぎながら」眠りについた記憶や、寝つかれなかった母がたまに語ってくれた「「白い鳥」の話」などに、幼少期の格別の喜びがあったと回顧している¹³⁾。さらに、母が町の銭湯に連れて行ってくれた時に風呂場で耳にした、母と「知り合いのおかみさんたち」との「笑ったり、話したりしている」声もまた、「ふい、と心にうかんでくる」「冬の雲間をもれる、陽の光のよう」な思い出として回想される¹⁴⁾。

椋の母親にまつわる言説はいずれも、幼少期の恒常的な寂しさと、それを帳消しにしてくれる「母」という存在、その存在と直接的に「肌」が触れ合うような暖かい交流として語られる傾向がある。そのため、椋は自身の経験に基づいて運動を次のように定義する。

私たちは、この運動を、「子どもの読む、楽しい物語に、静かに耳をかたむけてくれる、心の肌の細かいおかあさんを……その間〔20分間：引用者注〕だけ、ほんとに、私だけのおかあさんを……」子どもの手に、とりかえす運動であるとも考えている

『母と子の20分間読書』 p. 59

「母と子の20分間読書」は、本を通じて「家庭の中に、知識を持ちこむ一つの窓」¹⁵⁾であると同時に、「同じ主題」のもと、「子どもの声を通して、親もともども感銘」し、「同じ世界にとけあって、ともに楽しく」「共鳴」することのできる方法¹⁶⁾であり、さらには、失われた、または、失われそうな「おかあさん」を「子どもの手に、とりかえす運動」とされるのだ。

ここで、『出かせぎ村のゾロ』が山形の親子読書運動のなかで課題図書として読まれた

10) やまがた文学祭実行委員会『やまがた文学の流れを探る：親子読書運動の黎明』2017年を参照。

11) 『母と子の20分間読書』あすなろ書房、1961年、p. 1

12) 注9、p. 126

13) 注11、p. 56

14) 注11、p. 57

15) 注11、p. 75

16) 注11、p. 65

ことを思い起こすと、『出かせぎ村のゾロ』の用意したジロの悲痛なつぶやきが、「母と子の20分間読書」の論理（「私だけのおかあさんを〔…〕子どもの手に、とりかえす」）に合致することがわかる。

またさらに、このとき興味深いのは、『出かせぎ村のゾロ』では出稼ぎによって父と共に長期間不在になる母が描かれたが、現実には、父親が出稼ぎに出て母親は家に残る家庭が比較的多かったという事実である¹⁷⁾。山形県立図書館の司書だった佐々木悦が、1971年3月に上山市の小倉で行った親子読書会では、「出かせぎ村では母親が柱だよ」という声が参加者から出たという¹⁸⁾。父親が外へ働きに出ている間、地域に残って農業や家事、子育てを行う責任者として母親の存在感はむしろ増していた。その「出かせぎ村」の状況を受けて、『母と子の20分間読書』に影響を受けた親子読書運動は、家庭内で子どもの語りに耳を傾ける「聞き手」としての位置に母親たちを置き、彼女たちを親子読書運動を遂行するエージェント¹⁹⁾として育成していったと考えられる。

おわりに

山形教育文化運動は草の根的なネットワークによって構成されている。本論はそのごく一部に言及したに過ぎないが、1970年代半ばには「県内の急行列車が停車する市町村には必ず子どもの本研究会」²⁰⁾がある状況を作り上げることとなるそのネットワークの背景として、高度経済成長期の「出稼ぎ問題」という地域にとって抜き差しならない課題の存在と、そこで新たに見出されていった「母」というエージェントの関係を、雑駁な議論ではあるが本論では試論として示した。今後の課題としては、筆者の主要な研究分野である「民話運動」とこの親子読書運動の関係性をより詳細に明らかにすることを目指したい。

17) 当時は、いわゆる母ちゃん・ばあちゃん・じいちゃんによる「三ちゃん農業」や「母ちゃん農業」という言葉が流行語になっており、山形でも、不完全なデータであるが、1963年度の東置賜郡和郷村沖郷地区における出稼ぎの男女比は総数229人中男性が224人で女性が5人と、圧倒的に男性の出稼ぎ者の方が多い（中野三郎「山形県下一農村にける出稼の実態：東置賜郡和郷村沖郷地区」『立正大学文学部論叢』第24号、1966年3月、p. 17を参照）。また、「無名山脈の会」の「東北農村の出稼ぎの実態」においても、「出稼ぎと若妻」と題された論考のなかで、農業と家事、子育てを一手に追う「残された妻の、家庭内における精神的苦労」や「肉体的負担」を問題視している。

18) 佐々木悦『『出かせぎ村のゾロ』をめぐって』『子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌』第187号、1971年11月、p. 21

19) 母親を子どもと本の家庭内における仲介者（＝エージェント）としてとらえる見方については、大橋眞由美『近代日本の〈絵解きの空間〉：幼年用メディアを介した子どもと母親の国民化』風間書房、2015年を参考にした。

20) 注1の土田茂範編『海図のない航路』p. 421